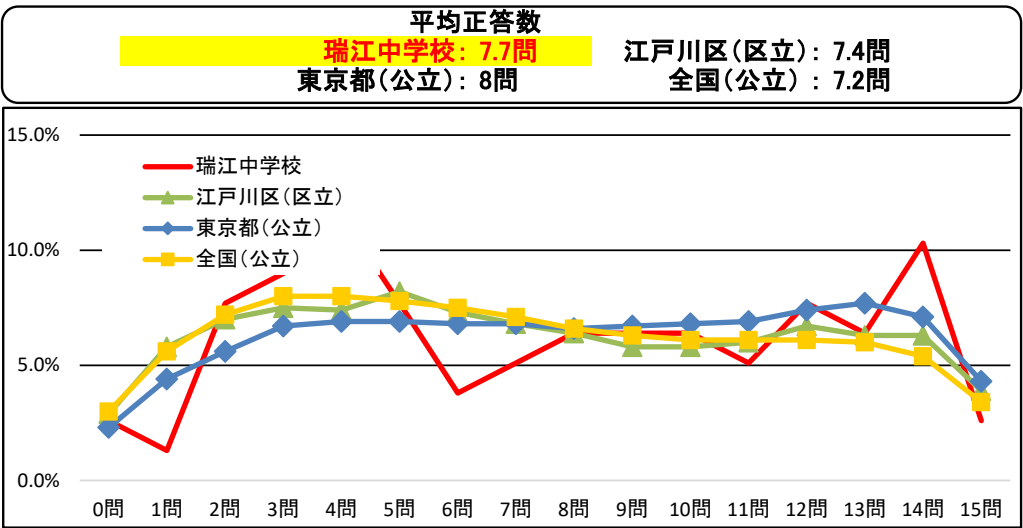


令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析表【数学】 瑞江中学校

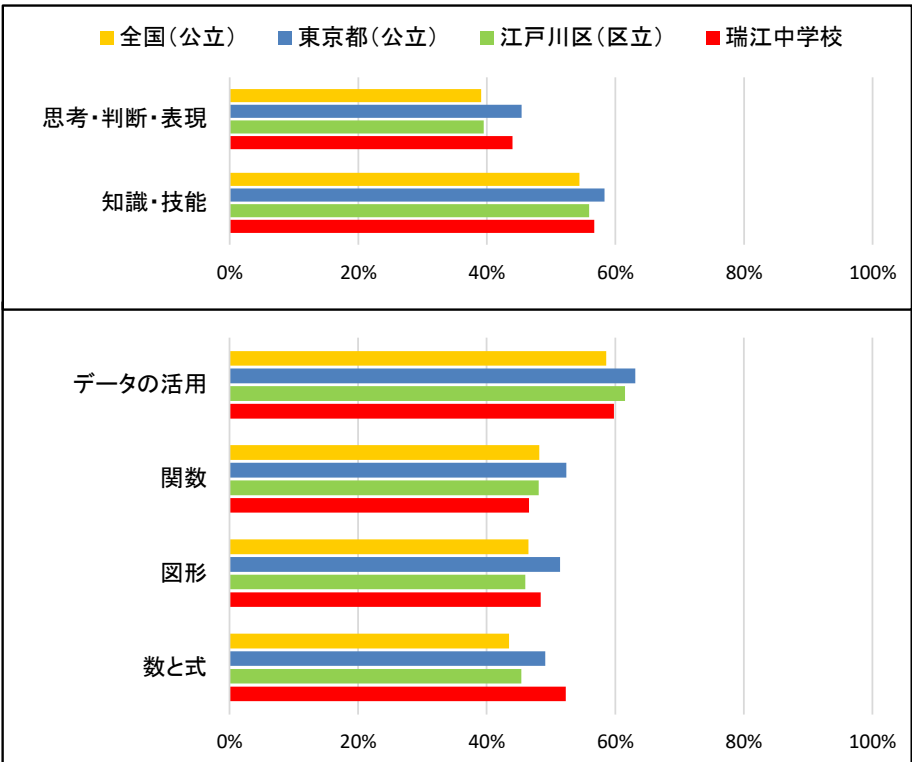
正 答 数 分 布



【平均正答率の差】

瑞江中学校	52%
江戸川区(区立)	49%
東京都(公立)	53%
全国(公立)	48.3%
都との差(ポイント)	-1.0

「領域別」の結果

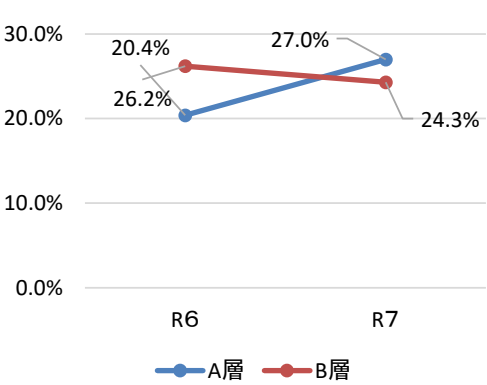


四 分 位 に お け る 割 合 (都 全 体 の 四 分 位 に よ る)

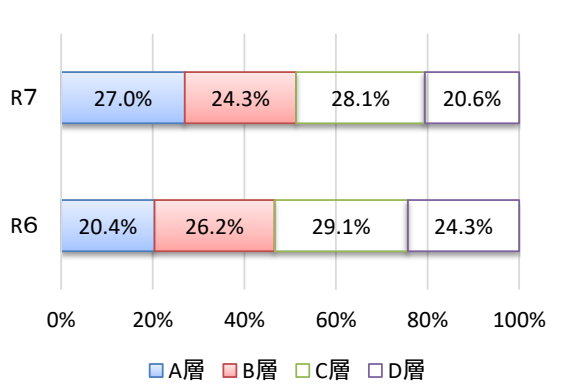
数 学	上位 ← → 下位			
	A層 12～15問	B層 8～11問	C層 4～7問	D層 0～3問
瑞江中学校	27.0%	24.3%	28.1%	20.6%
江戸川区(区立)	23.2%	24.0%	29.6%	23.2%
東京都(公立)	26.5%	27.0%	27.5%	19.0%
全国(公立)	20.9%	25.1%	30.2%	23.8%

四分位とは、データを値の大きさの順に並べたとき、児童数の1/4、2/4、3/4にあたるデータが含まれているのはどの集合かを示すものである。下の表では、四分位によって児童をA、B、C、D層に分けた時のそれぞれの層の児童の割合を示している。なお、本データで示している四分位は、東京都(公立)のデータを基に定めている。

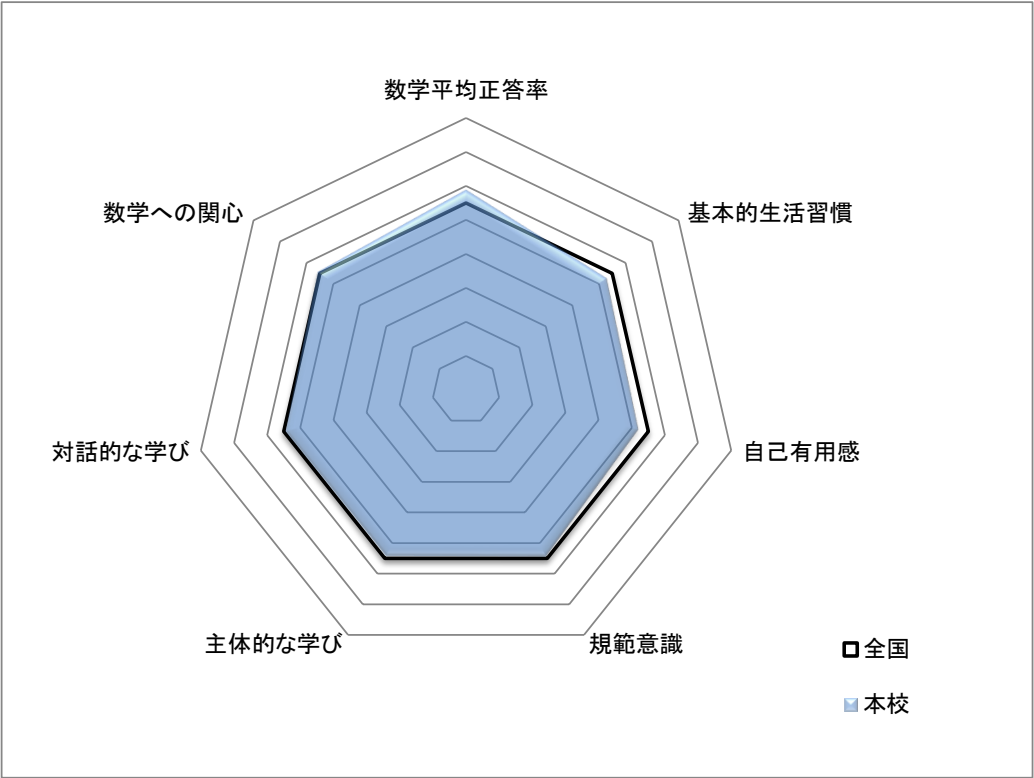
AB層割合の推移



AB層割合の前年度比



各 領 域 に お け る 、 全 国 平 均 正 答 率 及 び 、 全 国 の 肯 定 的 回 答 合 計 値 を 基 準 と し た 場 合 の 、 本 校 の 様 子 。



《チャートの特徴》

数学の平均正答率を除き、全ての項目で全国平均を下回っている。しかし各項目いずれも全国平均正答率や肯定的回答に接近している状況にある。「対話的な学び」「主体的な学び」については一昨年・昨年と年々改善傾向にある。しかし「自己有用感」の肯定的回答の全国との差が比較的大きい点は課題である。「対話的な学び」「主体的な学び」をより大切に、生徒が自信をもって課題に取り組めるように授業改善を実践していくことで、数学の授業を通して「自己有用感」を高めさせていきたい。

《家庭・地域への働きかけ》

昨年度から家庭学習の習慣化に向けて、1・2学年では土日含め毎日1日ノート1ページ以上の学習に取り組む「家庭学習ノート」の取り組みを開始し、本年度は全学年で実施している。生徒のノートからは数学では徹底して計算練習している生徒や図形の証明問題に取り組む生徒の様子が見える。全国学力学習状況調査の正答率の更なる向上と生徒の希望する進路実現に向けた取り組みを家庭と連携して遂行していく。

《現状把握》

●AB層の割合と取組内容について

本年度の数学では生徒全体に対するAB層の割合が昨年度から4.7%上昇し、51.3%と半数を超える結果が得られた。特にA層の割合については江戸川区・東京都・全国すべてで上回る結果となり、この要因の一つが数学少人数授業の効果的な実践の結果と考えている。本校では、基本的に各学年2クラスを発展・標準1・標準2の3クラスに分けて習熟度別の授業展開を行っている。発展クラスでは、通常の授業内容に加えて応用的な数学的課題に積極的に取り組み、標準クラスでは主に既習事項の復習に重点的に取り組んできた。この実践からAB層の割合の上昇とともにCD層の割合の減少にもつながったと考えている。

・教員の指導力向上

本校では全教員が年間の授業の任意の時間で研究授業を設定し、実施している。その際、授業者と観察する教員の間で意見交換をすることで今後の授業に向けて改善を図っている。数学科の教員の中でもICT機器の有効な活用方法の議論や授業教材の共有等を積極的に実践している。また本校では各教科で教科主任を中心に授業進度の調整や授業内容における重点指導事項の確認等を適宜共有しており、数学科においても同様の取り組みを進めている。

・基礎学力の保障

本校では江戸川区の教育施策「数学単元別検定」が実施となった初年度から現在まで継続して取り組んでいる。本年度は1・2年生での試験日のタイミングをそろえたことで、より全校体制での実践が進んでいる。特に試験後の補習教室に力を入れており、数学科教員を中心に数学が苦手な生徒を対象に放課後等に実施をしている。出題内容によっては補習時の授業スタイルも工夫をし、誰一人取り残さないための学力向上に尽力している。

・学習習慣の確立

現在の3年生は入学時から数学への取り組み方として、家庭学習では復習に力を入れさせてきた。毎授業終了後に補助教材から課題を提示することで、授業内容の定着とともに学習習慣の確立を目指してきた。今回の全国学力学習状況調査における数学のAB層の割合の増加及びCD層の割合の減少は、本校入学次からの生徒の日々の努力の結果であるとする。この実践を今後、他教科においても実践できる体制作りが必要であるとする。

・AB層の育成

AB層の育成に向けた取り組みとして、数学少人数授業におけるクラス編成の工夫を行っている。発展クラスでは協働学習などにおいて周囲の仲間とより深い内容などの意見交換をし、お互いに切磋琢磨する環境がある。習熟度によるクラス分けを基本とするが、状況に応じて生徒本人と相談し発展クラスで授業を受けることを勧めている。更に高い問題解決能力や論理的思考力の育成に向けて、1つの課題に対して常に別解を考えるように学習指導をしている。あらゆる事象に対して様々な視点からものごとを考える力を育成し、学力の更なる向上を目指している。